



篇105篇の出だしから15節まで。23節から33節までが詩篇96篇(後で編集されていますのでそのままではないのですけれども)、詩篇96篇がここに書いてあります。そして34節から36節が、106篇の出だしと終わりという構成になっています。

たぶん、この第1歴代誌16章のこの祈りを使って、105篇、106篇がセットになっているような詩篇ですから、105篇の詩篇と106篇の詩篇を書いたのかなと。96篇はこの祈りを使って書かれているのかなと思います。もともと96篇,105篇,106篇があって合わせたのかもしれませんが…。96篇は、96篇,97篇,98篇,99篇の4つのセットですね。その詩集がありますので、そのことも連想しなければいけないものです。

このへんに24,24と書いてあるのですけれど、これは詩篇24篇を分析しようとして研究しているときに、これは96篇だね、歴代誌だね、申命記だね…というつながりで分析することになりましたので、ここ(16:11)に24篇、ここ(16:26)に24篇というようなことが書いてあります。

例えば24篇のつながりで言うと、出エジプト記15章のところに「主はいくさびと」と書いてありますけれど、詩篇24篇8節に「戦いに勇ましい主である」とあったり、24篇6節「御顔を慕い求める者」「御顔を慕い求める者」、「アブラハム、イサク、ヤコブの契約」ここに「ヤコブの神」とあったり、「地に満ちるもの」「地に満ちるもの、海とその中に満ちるもの」世界に天と地と海の話がスタートになったりします。それは、96篇、98篇にもあります。この新しい歌のところに出ています。出エジプト記という新しい歌、そして、第1歴代誌16章も新しい歌と言えると思います。9節と23節に「主に向かって歌え」「主に向かって歌え」これが、出エジプト記15章の「主に向かって歌おう」新しい歌の詩篇の中にあるのですね。主に向かって歌えということを行っていますので、新しい歌という言い方はありませんけれど、この詩篇も新しい歌であるということが言えるのでしょう。96篇には新しい歌という言い方がありません。この中にはないのですけれど。

4つの段落に分けました。どう分けるのが難しいですよ。3つに分かれているといえ、3つに分かれているわけです。105篇,96篇,106篇というように、3つに分かれているとも言えるのですが、アイデアとしては、105篇と106篇に囲まれている96篇の部分の2つに分けて4段落というものも考えましたが、今回は最初の2つのところを分けました。

8節から14節、15節から22節、23節から33節、34節から36節という4つに分けて考えました。「主に向かって歌え(16:8-14)」から始まっています。「主に向かって歌え(16:23-33)」「その栄光と力を歌う」ということです。「さばきは全地にある」という「地をさばくために来られる」というところで終わっていますので、ここのセット(16:8-14)と、ここのセット(16:23-33)という組み合わせです。「主に向かって歌う」「栄光と力」「くすしみわぎ」「みわぎ」「みわぎ」「ほめ歌え」「ほめ歌う」「御前で」「御顔をたずね求めよ」ですから、「神様の御前」「御顔」という言い方だけで聖所、御前に行くことが連想されるわけです。ですから、「主に歌う、栄光と力、みわぎ、さばき、御前」で「ハレルヤ」ということが、この2つの共通点。

主はとこしえに契約を覚えておられるということが、第1歴代誌16:15からのところです。105篇の後ろの16節からのところを見るとずっと歴史が記録されています。神様の契約に忠実に導いてくださったという歴史が書かれています。106篇のほうは、残念ながらこの間は、民は忠実ではなかったということがずっと記録されています。けれども契約に対してということですね。それで「とこしえの契約、とこしえの契約(16:15-22)」、「とこしえに変わらない、とこしえにほむべきかな(16:34-36)」ということで、

とこしえの契約というのが、こちら(16:15-22、16:34-36)の共通点と見ました。散らされたのですね。カナンの地を分け前とすると言われましたけれど、まず最初に散らされました。そこに入っていきました。しかし神様は国々の中から集めて救ってくれるというところで、散らされるところから集めるというところで終わります。

このとこしえの契約というものは、アブラハム、イサク、ヤコブに誓われた誓いです。めぐみと真実は変わることはありませんということですので、こちらは「アーメン」というように見ることができると思います。「ハレルヤ(16:8-14)」「アーメン(16:15-22)」「ハレルヤ(16:23-33)」「アーメン(16:34-36)」というつながりです。それが、a(16:8-14)、b(16:15-22)、a(16:23-33)、b(16:34-36)です。

それと、もう一つのつながりは、前半、後半というよりは、外側と内側というように見るのかなと思います。外側のほうは、「主に感謝する(16:8-14)」「主に感謝する(16:34-36)」。そして「聖なる名を誇る(16:8-14)」「聖なる名に感謝する(16:34-36)」。これが共通点です。真ん中のところ(16:15-22)(16:23-33)は、何なのかということなのですが、散らされたというか、奴隷になったのですね。「奴隷の家から連れ出す」アブラハム、イサク、ヤコブの誓いを覚えて、奴隷の家から必ず連れ出しますと言っている段落(16:15-22)と、23節からのところを見ると、「天を造った」「天と地と海は神様のものである」と。すべての国々の中で偉大な力の栄光は、天と地と海を造った神様ということで、ここであらわされている。こちら(16:15-22)が奴隷の家から連れ出した。こちら(16:23-33)は、天と地と海を造ったという2つの大きな並行のあらわれがあると思います。

その2つを一緒に見ないといけないというのは、十戒を見るとわかると思います。申命記の十戒と、出エジプト記の十戒があるわけですが、申命記十戒の5章の「安息日を守ってこれを聖なるものとせよ」というところの理由です。「あなたは自分がエジプトの地で奴隷であったこと、そして、あなたの神、主が力強い御手と述べられた腕とをもって、あなたをそこから連れ出されたことを覚えていなければならない。」だから、安息日を守りなさい。これは、「奴隷の家から連れ出した」ということです。出エジプト記のほうは、それは言わないのですね。「安息日覚えて聖なる日としなさい。」と言った時の理由の中には、「それは、主が六日のうちに、天と地と海、またそれらの中にいるすべてのものを作り、七日目に休まれたからである。」だから、安息日を守りなさい。

出エジプト記のほうは、天と地と海を造りました。申命記のほうは、奴隷であったところから連れ出しました。これが、15節から22節までが申命記、23節から33節までが出エジプト記の「安息日を守って、それを聖なる日とせよ。」と、むなしい神々に対して戦っている天と地を造った神様ということ。その栄光があらわされたという2つの安息日を守る聖なる日であると宣言する理由の箇所が2つにありますので、こちら(内側)をまとめているのは、十戒の4番目。そして外側は十戒の3番目ということで、この並行が見れるのではないかと考えました。

主の聖所に住む時に、主の御顔をたずね求め、聖なる御名に感謝するのですね。その感謝する歌をここで歌っているのですけれど、歴代誌のほうは、特に礼拝の歴史。サムエル記と列王記のほうは、王の歴史ということが言えます。礼拝の歴史、祭司の歴史の中にこの歌が書かれています。王の歴史のほうには、これは書かれていません。ダビデが契約の箱を持ち込みます。第2サムエル記(6章)の中には、この歌は書かれていないのですけれど、ケルビムの上に座しておられる万軍の主の箱が、王座が入ってきたわけです。それで、敵から守って安息を与えられたので、家を建てたいというところに入って

